

論文

人間的労働の経済学的考察（二）

山 本 二 三 丸

は し が き

- 一 人間的労働の基本的意味……………（以上、本号所載）
- 二 本来的私的所有のもとの人間的労働……………（以下、次卷所載予定）
- 三 人間的労働力の商品化
- 四 資本制的私的所有のもとの人間的労働
- 五 社会的所有のもとの人間的労働

は し が き

ふつう経済理論でとりあつかわれるものは、たとえば商品、価値、貨幣、資本、利潤、利子、地代などというような、経済的諸範疇である。そこで主として問題にされるのは、これらの範疇の内容がどういうものであるか、また、それらの範疇のあいだの関係はどのようなになっているか、ということである。もちろん、これらの範疇の内容をとら

えるときには、それらが人間の一定の生産関係と結びつき、その人間の社会的諸関係を物的属性として表現したものがほかならぬこれらの範疇であるということはすでに明らかにされており、これらの生産諸関係そのものについての究明もこれと並行しておこなわれているわけであるが、しかし、範疇そのものを理解することがむづかしいうえに、諸範疇の関連を追究するというようなさいには人間の社会的関係そのものがいきおい後景にしりぞいてしまうために、えてして、たんに諸範疇を論理的にのみとらえようとする傾向が生みだされがちである。ここに『論理的にのみ』というのは、いうまでもなく、客観的な事物の發展法則の反映としての論理的把握ということではなく、ただ言葉の上で、いわば形式的に、つじつまを合せるといった類いのものである。たとえば、よく「資本の論理にしたがえば」などという文句がつかわれるが、こういう文句は、それ自身、客観的な發展法則を正しくとらえることができないで、いわば生まつかじりの理窟——形式論理——だけこねあげているということを端的に示しているものである。科学的經濟理論がどういうものであるかがよくわからないで、ただ言葉のつながり具合だけを追っかけている多くの『理論家』は、このような『資本の論理』をこねあげて事なれりとしているが、これではただの理窟が出来あがったというだけであって、現実の人間の社会的関係はこれといっさい関係なく、まったくちがった方向に、法則的に發展しているという事態が当然にみられることになっているのである。

もちろん、範疇の自立化、諸範疇の人間支配という法則的事実については、これをじゅうぶん正しく認識していることが決定的に大切である。これは、資本主義的生産様式における根本的特徴のひとつであって、この事実を的確にとらえていないでは、資本主義的生産様式についての正しい理論的把握はとうていおぼつかない。だが、それにしても、範疇そのもの、諸範疇の論理的関係そのものに眼を奪われて、生きた人間の関係がどのようになっている、それ

がどのように發展していくかということをもっとく見ないということは、とうてい許されない。大切なことは、諸範疇の運動と人間の関係の運動との関連、両者のからみあい、両者の相互制約、相互依存の関係を正しくとらえることである。もっと厳密にいいあらわすならば、人間の関係がどのような範疇として自立化し、その自立化した範疇の運動によって、いかに現実の人間の関係が支配され、動かされ、変化し發展せられるか、ということをもっとく正しくとらえること——ここにこそ、科学的經濟理論の眼目が存するといわなければならない。

範疇そのもの、諸範疇の論理的関係そのものについては、すでにむかしから論じられており、完成された理論体系を与えられているが、しかし、生きた人間の関係そのものに主眼をおいて、その發展をあきらかにすることをねらって書かれた労作は、あまり見当たらないようである。そのためであろうか、古典的な理論体系の内容を正しくとらえることがむづかしくなっていて、ここからしてまた、さきにも述べたように、『資本の論理』などと称して屁理窟——「raisonnement」——をこねあげる部類も跡をたたないという現象が生ずることになっているようである。この小論は、範疇そのものを主としたこれまでの論述とちがって、生きた人間を主体として、その經濟的意義とその發展関係を中心として、社会の經濟的發展法則の貫徹の仕方を究明することをねらって書かれたものである。言葉をかえてやさしくいいあらわせば、本論の課題は、生きた人間というものを中心として、社会の發展のあり方をしらべてみる、ということができようであらう。

わたくしは、かねてから、比喩的な意味で、『人間經濟学』なるものを主張してきたが、この『人間經濟学』という言葉は、經濟学の対象がたんなる論理的範疇そのものではなくして、人間の関係およびその發展法則でなければならぬということをも強調するために用いられたものである。もっと詳しくいうならば、それは、經濟を動かすもの、社

会を動かすものは、なるほど金であり、資本であるが、しかし、とくに今日ではこの貨幣の力、資本の力にたいして人間の力が特別の意義をもってきており、むしろ、この人間の力に依存しないでは、貨幣の力、資本の力が発揮されないこと、しかも、現在は貨幣の力、資本の力を打ち倒して正しく人間の力を組織し、これを全面的に発揚すべき世界史的段階にあること、したがって、真に経済を動かし、社会を動かすものとしての人間の意義を明かにし、人間自身がその意義を認識し、その力を自覚し、その力をどのように結集し發揮すべきかということを根本的に明確にするものこそが、ほかならぬ科学的経済理論でなければならぬ、ということを表明するためのものであったのである。このような『人間経済学』としての科学的経済理論の意義をあきらかにしようというのが、本論のひとつのねらいである、ということができる。

それゆえ、本論の表題は、便宜のため一応、「人間的労働の経済学的考察」としてあるが、その意味するところは、正確にいえば、「人間、人間労働力および人間的労働についての経済学的考察」ということなのである。

一 人間的労働の基本的意味

(1) 富の源泉としての人間的労働

人間が生存するためには、いうまでもなく、さまざまな生活必要物資、たとえば食料、衣料等々がなければならぬが、これらのものは天然自然にできあがったものとして人間にあたえられるものではない。人間が自分自身の力で、その身体をはたらかして労働して、これらのものをつくりださなければならない。生活必要物資がなければ人間も社会も成り立つことができないということは、いいかえれば、人間が労働しなければ人間自身も社会も存続できな

い、ということである。これらの生活必要物資をつくりだす人間の労働があつてはじめて人間と社会が成り立つことができるといふことは、たいへん簡単なことであり、自明のことであるが、しかし、ふだん営利的事業に没頭しているひとびとには、このことはそれほど容易にはわからないし、それが重要な意味をもつものだということは、なおさら感じとることができない。⁽¹⁾このような、社会存続の条件としての人間の労働の意義をいやおうなしに痛感させられるのは、人間の労働が不十分にしかおこなわれないで生活必要物資のいちじるしい欠乏が生じたときである。⁽²⁾

(1) 資本主義社会では、ほとんどいっさいの事柄が逆立ちしてあらわれる。そこでは、人間および社会の存続を支える物質的富を生産するための労働、とりわけ簡単な肉体的労働は、社会から報いられることもっともすくなく、したがってまた、もっとも軽蔑されることになっており、これと反対に、物質的富の生産にはなんら関係するところのない寄生的な商売で、他人の懐中からロハでできるだけ多く捲きあげる『仕事』が、もっとも多く多くの社会的富を支配し、したがってまたもっとも多く尊敬されることになっているのである。人間そのものが金にひきずりまわされ、金の前にはいつくばることをよぎなくされているような世の中で、どうして、人間の労働の意義が、人間の偉大さ、尊厳さが、俗物どもにわかるであらうか。

(2) このもっとも適切な例は、戦争による物資欠乏の時期である。このときには、いかなる拝金主義者といえども、またいかなる万長者といえども、社会の存続を支える人間の労働の意義を——その胃袋と皮膚との感覚を通じて——十二分に思い知らされる。そして、たんに思い知らされるというだけではなくして、その上に、社会の存続を支えるような人間の労働に関係するところのない、寄生的な金儲け第一の『仕事』や商売は、国民にとって有害無益の不生産的な『仕事』——いわゆる『穀つぶし』——として国家権力によって『整理』され、かれらがふだん軽蔑していた肉体的労働その他の人間の労働に従事することを強制されたものである。もっとも、この戦争によつての人間の労働の意義のよぎない承認というものは、侵略戦争をおっぱじめたような帝国主義国においては、その本来の意義を十二分に認識した上でおこなわれたわけではないのであつて、そのために、例によつて例のごとき『裏道』、『抜穴』がいたるところにつくられており、物質的富の生産を増強するところか、いたずらに形式だけの人間の労働力の動員におわり、あいかわらずの、寄生的、浪費的徒食組が温存され、かくして予定どおり、当然の敗戦を招くことになったのである。

人間的労働は、どんな社会においても、人間と社会との存続を支える生活必要物資、すなわち社会的富をつくりだす源泉であるが、しかし、それは唯一の源泉ではない。人間の身体をどんなに動かしても、その筋肉をどんなに活動させてみても、それだけではなにひとつ生れてこない。生産物は、人間がかれ自身の外部に在る物にはたらきかけることによって、いいかえれば、外界の対象にたいしてかれ自身の人間的労働を作用させることによって、そこにはじめてつくりだされる。だから、人間的労働にとっては、かならず労働対象がなければならぬ。しかも、この労働対象を、人間はじかにその身体の一部——主として手——をもって直接につかみ、この形を変えろということではないに、この労働対象とかれ自身の身体とのあいだになんらかの道具をおき、この道具をつかつて、これをなかだちとして、その労働対象にはたらきかけて、生産物をつくりだす。これらの道具をつかつてはたらきかけること、これらの道具、いいかえれば、労働手段をつくりだすこと——ここに人間的労働が猿やその他の動物の労働とちがっている本質的な差異点のひとつがある。これらの道具——労働手段——の製作と使用とが、人間的労働の特徴であり、また、この労働手段の製作と使用とによつてはじめて、人間的労働が人間的労働として成り立つことができ、またそういうものとして無限に発展することができるようになったのだ、ということが出来る。

人間的労働は、労働手段をつかつて、労働対象にはたらきかけ、これから必要な形態の生産物をつくりだすものである。だから、人間的労働は、生産物をつくりだすための主体であつて、労働対象と労働手段とは、そのための手段、いいかえれば、生産手段にすぎない。人間的労働が生産の主体的要因であつて、生産手段は生産の客体的要因である。この、生産における主体的要因ということは、ここにのべたように、人間が自分自身にとって必要なものを自分でつくりだすという点からみて云われたことであるが、しかし、なおそのほかに、つぎのような意味がふくまれて

いる点を見逃してはならない。それは、もし、人間的労働がなければ、人間の側からの積極的な、主導的なはたらきかけがなければ、労働対象——たとえば、原材料——も、労働手段——たとえば、道具、機械など——も、生産手段としてはたらくことができないばかりでなく、さらにすすんで、それらが生産手段として役立つことのできる諸性質がそこなわれ、損耗してしまって、ついには、生産手段としてはもはや役に立つことのできないものになってしまう、ということである。どんなに複雑で精巧な生産手段であっても、人間的労働のはたらきかけがあって、そのおかげではじめて生産手段として役立つことができるが、しかし人間的労働のはたらきかけがやめば、じきに生産手段として役立つことのできないものになってしまう。人間の生きた労働だけが、死んだ、生命のない生産手段を生かすことができる。だから、生産手段は、人間そのひとのためにあるというだけではなく、人間そのひとによってはじめて生かされ、人間的労働によってはじめてその存在意義をあたえられる。人間的労働が生産の主體的・主導的要因であるということの意味は、およそ右のとおりなのである。⁽³⁾

(3) W・ベティの言葉とされている「労働は富の父であり、その積極的元本である、土地はその母である」という命題は、ふつうには、生産の二要因としての人間的労働と生産手段（および労働諸条件）を指して云われたものと考えられているが、しかし、見方をかえれば、この命題は、生産の主體的・主導的要因である人間的労働の意義について、とりわけ価値生産における人間的労働の決定的意義についての示唆をふくむものとみることができるのである。

人間的労働とは、一般に、人間的労働力の生産的支出であるといわれている。そこで、つぎに、人間的労働力とはどんなものか、その内容について簡単にみておこう。

(2) 人間的労働力の内容

人間的労働の経済学的考察（一）

労働力とは、人間がその身体のうちにもっているものであって、人間にとって必要な生産物をつくりだすときにはかならずこれをはたらかし、作用させなければならない肉体的能力および精神的能力の総計のことである。

そこで、まず、これらの労働能力を構成している要素、つまり、人間の身体 of 各主要部分について、それらがどんなものから成り立っているかをみてみよう。

第一に挙げられるのは、人間の脳髓である。この脳髓こそは、人間の労働能力のもっとも中心的な構成成分であつて、これがまた人間を動物から区別するもっとも大切なものである。この脳髓が人間の身体 of いったいどの部分のあらゆる活動を統括し、指揮する。人間のどんな肉体的能力も精神的能力も、すべてこれによつて決定されるということができる。とくに、精神的諸能力、たとえば、理解力、記憶力、判断力、想像力などは、もっぱら脳髓そのものによつて左右されるし、人間の労働を動物の労働から区別するところの、重要な因子である意志力は、精神的諸能力のうちのもっとも根本的なものであるが、これまた直接に脳髓に依存している。

つぎに挙げられるのは、神経、筋肉、手、足、感官等であるが、われわれは、それらのうちでとくに、眼と手とが人間の労働にとつて決定的な意義をもつものであることを指摘しておかなければならない。精神的諸能力の作用と發揮は、これと密接にむすびついた眼のはたらきを必要とするし、同様に手のはたらきもまた、これとむすびついた、よくはたらく眼を必要とする。人間の眼は、いわば、脳髓と手との緊密なむすびつき、それらの共同的結合機能を媒介するひとつの要めであるとも考えられる。また、手そのものは、人間の肉体的諸能力をいわば統括するものといえるほどの地位を占めている。人間の手が労働手段をとらえ、これを労働対象に直接はたらかし、かくして生産物をつくりだす直接の中心的要因となつてゐる。手を通じないでは、手によつてそのはたらきかけを媒介されないでは、人

間の労働力は、そのようなものとしてじっさいに機能することもできないのである。

右のようにして、人間の労働力を構成するものは、簡単にいえば、人間の脳髓と眼と手との三つである、ということが出来る。人間の労働力、いいかえれば、人間の精神的諸能力も肉体的諸能力も、すべてこれら三つのうちに集約的にふくまれていると考えることができる。そのうえ、これら三つのものは、個々別々に発達してきたものではなく、たがいにかく結びつき、条件づけあっている、それぞれ同じ高さのはたらきをもつものとして——共同的に、結合的に作用すべく——つくり上げられてきている、といわなければならないのである。

ところで、以上は、人間の労働力の構成要素についての簡単な説明であるが、しかし、これらの構成要素はどんな人間でも、およそ人間ありさえすればかならずひとりでにそなわっているものかといえば、けっしてそうではない。人間が一度この世に生をうければ、あとはどこにしよう、何をしよう、生きていきさえすれば、たとえば満二十才になれば、ひとりでに一人前の労働力をそなえるようになるなどと考えていたら、大間違いである。たとえば、幼児のときにさらわれた文明国人が、原始林の中で動物といりまじって生活をしているときには、かれは成年に達しても、言語を解することもできず、動物と同じ肉体的能力と貧弱な精神的能力しかもちえないものとなってしまふことは、よく知られている。だから、こんにち、文明社会においてふつうの、平均的な労働力、いいかえれば、一人前の精神的能力と肉体的能力とを身につけるためには、まず現在の発達した社会のなかで生活していることが絶対に必要である。

つぎに、人間が誕生してから成年に達するまでのあいだの必要生活手段もさることながら、これを一応別とすれば、その間に人間の精神的能力および肉体的能力をその社会の平均的水準の高さまで発達させるために必要な知育と体

育とがほどこされねばならない。はじめは、手、足、首などの動かし方、いろいろの物や人を識別することからおしえ、言語をおぼえさせ、相手の言葉を理解すると同時に自分の考えを相手につたえることを学ばせなければならぬし、そのためには、ふだんの行きとどいた養育が必要である。その社会における平均的な養育および教育をうけ、疾病その他の多くの障害をのりこえ、周囲の人々と社会および本人自身までが並々ならぬ苦勞と数えきれない物質的ならびに精神的負担をおい、およそ十八年の歳月をついやして、ようやく一人前の精神的能力と肉体的能力を、つまり、社会的・平均的な人間的労働力を身につけた人間が、すなわち、真に社会的人間として必要な能力をそなえた人間が生みだされるのである。

(3) 合目的的支出

ところで、人間的労働力の構成要素はおよそ以上のとおりであるが、しかし、これらのものをたんに身につけているといっただけでは、まだ真に社会的人間としてその実を示したものであるということはできない。これらの構成要素を現実に活動させること、いいかえれば、人間的労働力の現実的な支出によって、はじめて労働力が労働力であることが示される。人間的労働力は、その生産的支出においてはじめて、自己を人間的労働力として実証しなければならない。そこで、つぎに、この人間的労働力の支出そのものが、その流動の性格が、問題となる。

人間のほかの動物でも、それらがその身体のうちにある労働能力をはたらかして、必要な生産物をつくりだす。たとえば、蜘蛛は、じぶんの手足をつかつてきわめて器用に、しかも正確に、その巣をかけるし、また蜜蜂は同じくその身体をつかつてきわめて精巧な蠟製の窩^すをつくりあげる。これらのものは、どんなに熟練した裁縫師や建築

師が真似をしようと思っても、とうていできないような、まことに美事な生産物である。だが、これらの動物の生産的活動そのものがたとえどんなにすぐれた生産物を生みだそうとも、人間の生産的活動——つまり人間の労働——にくらべて、はじめから本質的にちがっている点がある。それは、人間の労働のばあいには、労働力の意識的・合目的の支出がおこなわれるのにならして、動物のばあいには、その支出が無意識的・本能的である、ということである。

人間がその労働力を支出するさいには、その支出にさきだって、その支出の結果が、つまり生産の過程と生産の結果——生産物の形成——が頭の中で考えられている。したがって、労働力の支出は、はじめからおわりまで意識的・合目的なものとならざるをえない。なぜならば、労働力の支出の結果として生みだされてくるものは、それにさきだって人間が頭の中で考えていた当の成果でなければならないからである。人間は、動物のように、ただ自然的なものの形態変化だけを生ぜしめるのではない。人間は、はじめから一定の目的を意識し、その目的にしたがって自身自身の労働力の支出を規定し、しかもその目的実現のためにいっさいのものを統一的・集中的に役立たすべく、自分の意志をその目的にそってはたらかし、これによって、自然的なものうちに自分の目的を実現するのである。さきに労働力の構成要素についてのべたさい、精神的能力のうちでもっとも重要なもののひとつは意志力であると説明したが、この意志力の発現が一定の目的にそっておこなわれることが、しかも労働力の支出の全期間にわたってのそれが、必要とされるのである。

このようにして、人間の労働を特徴づけるものは、人間の労働力の統一的・合目的の支出であるということができる。だが、この合目的の支出ということとは、なお、これを他の面からすこしく掘り下げてみておく必要がある。

動物の労働は無意識的・本能的なものであるというだけにはとどまらない。その無意識的・本能的活動が動物のい

っさいなのである。動物は、いわば、その本能的な生活活動と直接に一致してしまっている。だが、これにひきかえて、人間は、自分自身の生産的活動をはっきりと意識し、これを意慾および意識の対象とする、つまり、意識的な生産的活動をおこなっている。もっと一般的にいえば、人間の生活行為そのものが人間によって意識され、生活そのものが意識されているのである。人間は、いわば、意識的存在であって、人間自身の生活が人間にとってひとつの対象となっているのである。その意味において、人間の生活行為は、自由な行為だということができる。動物は、その直接的な肉体的慾望に支配されて、自分やその仔のために直接必要なものだけしか生産することができない。動物の生産的活動ははじめからきわめて制限されており、まったく一面的なものである。だが、人間は、動物とちがって、自分自身の肉体的慾望からはなれて自由に生産し、しかも、肉体的慾望から自由であるときにはじめて真の意味での生産をおこなうのである。動物は、いわば、自分自身だけを生産するのであって、その生産物は、動物の身体に直接つながるものだけである。ところが、人間は、いわば、全自然を再生産するものということができるし、その生産物にたいして、人間は自由に対立することができる。動物は、その属している種の基準と慾望とにしたがって生産物をかたちづくるだけであるが、人間は、あらゆる種の基準にしたがって生産することができるし、またどんな場合にも、対象にたいしてそれ固有の基準を付与することができるのである。⁽⁴⁾

(4) だから「人間は、美という法則にしたがって、生産的活動をし、生産物をつくりだす」こともあるのである。

それゆえ、以上のことをとりまとめて、人間的労働を特徴づけるもっとも重要な一側面は、それが人間的労働力の意識的・合目的支出であるという点に求められなければならない。

(4) 労働手段

人間の労働を特徴づけるもっとも重要な本質的差異点のひとつが、労働手段の生産と使用にあることは、すでに述べたとおりであるが、この労働手段については、なお以下の点を注意しておかなければならない。

労働手段は、たとえば農業における土地のように直接自然から与えられたものもあるが、その大部分のものは、人間の手によって作りだされたものである、だが、人間の手によって作りだされたものといっても、無からこれをあらたにつくりだしたものではない。それはむしろ、人間がかれの外部にある自然的諸物がある一定の関係において組合せたものであり、一定の形態にもちたされた自然的諸物にすぎない、というべきである。人間は、その外部にある自然的諸物の諸属性——力学的・物理学的および化学的属性——を知り、これらを一定の組合せのもとにおき、それらを能力手段として他の諸物に合目的に作用させるために利用するにすぎない。これらの労働手段がその力学的・物理学的・化学的な諸属性を発揮することによって、労働対象はあらかじめ計画された形態のものに変化させられるが、しかし、これらの諸属性の作用そのものは、まったく自然的なものであつて、そこにはなんら人間の労働の介在する余地はないのである。

たとえば、高い崖の上から岩石を落して下にいる獣を傷つけてこれを捕獲するというような、すこぶる原始的な石製の労働手段についてみてみよう。この石を崖の上まで持ち運ぶためには、いいかえれば岩石の位置の移動のためには、人間の側の労働が必要である。また、この岩石を特定の形態に——獣を傷けたり、うちころしたりするのに適した形に——加工するためにも人間の労働がなければならぬ。そしてまた、この岩石を崖の突端にまで押し出してそれが落下するきっかけをつくるためにも、人間が労働しなければならぬ。だが、このようにして一定の形につくられた

岩石が崖の突端に押し出されれば、それからあとの過程は、すべて、この岩石の力学的・物理学的属性の作用によっておこなわれる。岩石が一定の速度で落下していくのは、この岩石にはたらく重力の作用によるものであるし、またこの岩石が獣の上におちてこれを傷ついたりうちころしたりするのは、この岩石の固さ、重さ、および形等々の自然的属性および自然的諸力によるものである。だから、労働手段そのものをつくりだすときにも、人間は、自然的諸力および自然的諸属性に依存しなければならないが、また労働手段そのものの働らきにおいても、その作用は、もっぱら自然的諸力および自然的諸属性の發揮にほかならないということがあきらかとなるのである。

右のことは、どんなに精巧な機械についても同じようにいえる。それは、要するに自然的諸属性をもつ諸物を一定の組合せのもとにおいたものであって、その機械の作用そのものは、機械を構成している自然的諸物のもつ自然的諸属性および自然的諸力自身の自由な——いいかえれば、人間の一定の目的にそつた——作用にほかならないのである。これらの機械をつくりあげるためには、いいかえれば、自然的諸物をこうした一定の組合せのもとにおくためには、人間はかれ自身の労働力をはたらかさねばならないし、また、これらの機械がその作用を開始するためには、たえず人間の労働によるいわば始動がなければならぬ。しかし、機械を組立てるための労働、機械を始動させるための労働は、機械そのものの作用とはまったく無関係であり、その間になんらの結びつきもない。

科学が発達し、その技術学的な応用がますます発達すればするほど、人間はますます自然的諸物の自然的諸属性および自然的諸力を広く深く知り、またこれを一定の目的の実現のために組合せ、作用させることができるようになる。この場合、科学の発達のためには、その技術学的応用可能性の発展のためには、人間の労働、とりわけ精神的諸能力の支出が必要であり、またこれを応用した装置、機械設備をつくるためには人間の労働力の特定の支出がなければな

らぬが、しかしこれらのきわめて複雑・精巧な装置、機械設備が人間の手によって稼動せしめられれば、その作用そのものは、まったく自然力の作用、自然力の發揮にすぎないのである。機械の驚くべき強力・精巧な作用も、まったく自然力の作用であって、そこにはなんらの人間の労働の支出を要しない。それは、いわば無償の役立ちを最後まではたすのである。

右のように、労働手段をつくりだすために必要な人間の労働および労働手段を作用させるために必要な人間の労働と、労働手段そのものの作用の完全な自然的・自立的性質とはつきり区別してとらえておくことは、決定的に大切なことである。⁽⁵⁾

(5) なお、労働手段については、周知のように、それが人間社会の発展段階を特徴づけるものとして重要な意味をもつものであることが指摘されねばならないが、この点は、さしあたって決定的な意義をもつものでないので、ここでは、この点についてマルクスが指摘しているところを引用してかかげておくにとどめる。

「遺骨の構造が滅亡した動物種属の身体組織の認識のために有するのと同じ重要さを、労働手段の遺物は滅亡した経済的社会構造の価値判断のために有する。何がつくられるかというだけでなく、いかにして、いかなる労働手段をもってつくられるかということが、経済的諸時代を区別する。労働手段は、人間の労働力の発展の測度器であるばかりでなく、そのうちで労働がおこなわれる社会的諸関係の指示器である」(インスティトゥート版、『資本論』第一卷、一八八ページ、長谷部訳(1)―三三三ページ、傍点―マルクス、ゴシック体―山本)。

(5) 労働の二面性

さきに、人間の労働を特徴づけるものとしての人間の労働力の統一的・合目的支出ということについて見たが、この合目的支出ということは、あらかじめ計画され予定された特定の結果をつくりだすための、それにむかっただけの支出ということであり、したがって、人間の労働力の流動そのものは、その目的および結果のみならず、その流動の

仕方、つまり作業方法、労働対象、および労働手段が一定しているところの流動でなければならぬ。いいかたをかえれば、それは、一定種類の、その形態を規定された支出、すなわち労働でなければならぬ。たとえば、織物をつくりだすためにおこなう織物労働は、ある一定の織物をつくりだすことをその目的としており、この目的を達成するために、特定の労働対象である一定種類の糸をもちい、ある特定の労働手段である織機をつかつて、これらのものを動かすためにある特定の仕事の労働をおこない、それによってその特定の労働の結果として一定の生産物——織物——をつくりだすものである。

およそ人間的労働であつて、その結果として一定の生産物がつくりだされることを目的としない労働はありえない。このことは、はじめに述べた社会存続の条件としての人間的労働、富の源泉としての人間的労働の意義を考えただけで明瞭である。何物をもつくりだすことのない労働は、労働ではなく、たんなる遊戯にすぎない。だが、なんらかの富をつくりだすものとすれば、そのための人間的労働力の支出は、当然に一定の目的をもった、合目的支出とならなければならないし、したがつて、その人間的労働は、ある一定の、形態を規定された、特定の形態をとった具体的労働とならなければならない。つづめていうならば、人間的労働は、つねに具体的な形態をとった労働、具体的労働でなければならない、ということである。

ところで、このような具体的労働は、なるほど、人間的労働力の支出のさいの形態にかかわりがあるものではあるが、しかし、この支出のさいの形態というものは、それが——さきにもみたように——合目的支出であるという性質上、当然に、その目的によって、いいかえれば、その結果としてつくりだされる生産物の性質によって、規定されたものでなければならない。ある一定の結果を生みだすものとして特定の形態が規定されるのであり、この目的、結果を

もつことのない労働は、たとえ、ある一定の形態の具体的労働であるという形式こそもっているにせよ、そのじつはまったく不生産的な、無用な労働であり、したがって人間の労働であるということはできない。それゆえ、具体的労働というものは、いつでもかならず、その有用的効果との関連において考察されなければならない。簡単にいうならば、人間の労働は、つねにその一定の有用的効果という結果からみて一定の具体的な労働、有用的な労働でなければならないのである。

だが、はたして、人間の労働は、右のような、具体的・有用的労働ということでその全体をいいつくすことができるだろうか？

人間の労働とは、人間の労働力の支出である。右にのべた具体的・有用的労働は、この人間の労働力の支出の特定の形態を問題としているものであって、いわばその支出の形式から人間の労働をみたものである。人間の労働力の支出は、もちろん、ある一定の形態をとることなしにおこなわれることはありえないが、しかし、その形態そのものを問題とするまえに、人間労働力の支出そのものが問題とならなければならない。人間の労働は、人間の労働力の一定の形態における支出であるが、それは、人間の労働が人間の労働力の支出そのものであり、その支出の形態のいかんを問わない、むしろその支出の形態を捨象した支出一般であって、このような実質——内容——が一定の形態——形式——をとるときにはじめて具体的労働となるのである。いうまでもなく、一定の形式をとることのない内容一般というものはありえないが、しかし、形式は、あくまである一定の内容がとる形式であって、内容のない、もしくは内容からはなれた、形式そのものというのはいない。われわれが形式を問題とするのは、ある一定の内容と結びついた、その内容の必然的な発現形態としての形式である。このことは、人間の労働力の支出としての人間の労働につ

いても当然、妥当するものでなければならぬ。

さきにみた具体的・有用的労働とは、いわば、その形式からみた人間的労働である。それは、人間的労働力の支出の形式を問題としたものであり、人間的労働の一側面にほかならない。人間的労働力の支出については、なお他の一面が、右の形式に対していわばその内容にあたるものがなければならぬ。それは、その支出の形態を捨象した人間的労働力の支出、支出そのもの、厳密にいえば、人間的労働力一般の支出、ということである。たとえば、農耕労働と織物労働とは、それぞれ特定の生産物をつくりだす労働としてその形態を異にし、したがって、両者はたがいに質的にことなる生産的諸活動であるが、しかし、そのどちらも、人間的労働力の支出、すなわち、人間の脳髓、筋肉、神経、感官、手、足等々の生産的支出であって、このような側面からみれば、どちらも同じ人間的労働であるといわなければならない。つまり、両者は、ただ人間的労働力を支出するための、二つのちがった形態にすぎないということになるのである。このように、それぞれの具体的・有用的労働のいわば内容をなすもの、その支出の形態のいかんを問わない、その形態の差異を捨象したところの、人間的労働力の支出そのものは、そのまま文字どおり抽象的労働と名づけることができる。

それゆえ、人間的労働は、つねにかならず、人間的労働力一般の支出として抽象的労働という一面をもつと同時に、他方において、その規定された有用的形態における支出として具体的労働という他の一面をもつものでなければならない。人間的労働力一般の支出としての人間的労働、すなわち、抽象的・人間的労働と具体的・有用的労働とは、同じ人間的労働の二面を成すものであり、この二面を統一したものととしてここにはじめて人間的労働が成りたっているのである。

人間の労働が、同時に、抽象的労働と具体的労働との二面をもつということ、これを逆にいうならば、抽象的労働と具体的労働との二面をあわせもち、これを統一するものとしてはじめて人間の労働がある、ということ把握することとは、決定的に重要である。この「労働の二面性」——または「労働の二重性」——ということは、きわめて自明のことのようにおもわれ、これを簡単にうのみにしてしまふ傾きがみられるが、そういう理解の仕方によつては、この「労働の二面性」の真の意義が、それが他の重要な諸概念とのあいだに密接な関連をもつものであることが、見逃されてしまい、結局、人間の労働そのものについての把握もきわめて一面的な、欠陥だらけのものとならざるをえない。そのような皮相なとらえ方の例として、つぎに三つの「考え方」をあげて、簡単に考察を加えておこう。

第一。人間の労働がつねに抽象的労働と具体的労働との二面をもっているということは、私的所有のもとの商品生産において、とくに生産物Ⅱ商品の価値形成において、つぎのような意味をもつことになる。すなわち、労働力の担い手である生産者は、その労働の具体的形態を通じて、すなわちその具体的労働という一面において、生産手段にはたらきかけ、これによつて、労働対象を特定の生産物に変形させることによつて、生産手段の価値を生産物に移転せ、これを保存する。それと同時に、かれはその抽象的労働という他の一面において、生産物のうちにあらたな価値部分をつくりだす（これが、いわゆる「純生産物」部分である）。

それゆえ、生産物Ⅱ商品の価値の内訳は、「生産手段からの移転Ⅱ保存」部分と「純生産物」部分とに分たれ、「純生産物」部分から「労働力の維持に必要な価値」部分を差引いた残りが「剰余生産物」部分となり、したがつて、これらの抽象的労働総量の内訳は、「必要労働」部分と「剰余労働」部分とに分たれることになるが、しかし、「生産手段からの移転Ⅱ保存」価値部分をつくりだすためにかれが特別に抽象的労働をおこなうということとはけつしてない。か

それは「必要労働」と「剰余労働」——つまり、抽象的労働総量——をおこなっているときに、同時に「移転＝保存」をなしとげる具体的労働をおこなっているのである。このような「二面性」の正しい把握の見地からみると、つぎのような主張がきわめて多くの問題をふくんでいることはあきらかである。

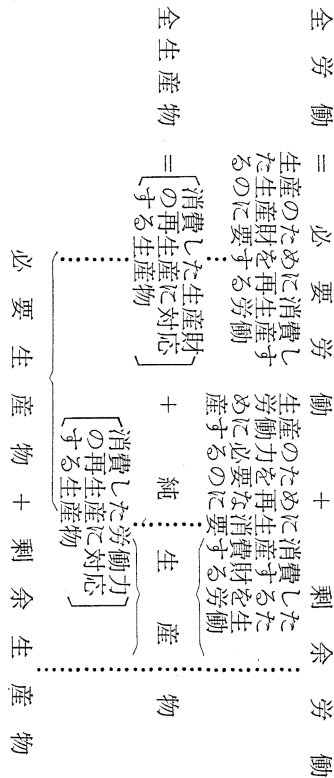
「ところで一般的に、生産活動は生きた労働が生産手段と化合して生産物なる新しい化合物を形成して定着する運動なのであるが、多くの場合に生産諸手段は大部分が生産財である。それ故、生産体系における人間の生産諸活動は右の化合物形成の運動を労働の面で跡づけることによって、すなわち、生産財という形で定着している労働と生きた労働との化合によって生産物の形で定着した労働が生成する反応によって、とらえることができる。そしてこの反応、すなわち生産活動、に際しては労働の総量が保存されていることを化学反応式の形で書き下すならば定着した労働も生きた労働も共に抽象的人間労働の労働時間で計測して、式中の各項が労働時間から成る一次式を用いればよいわけである。すなわち、

各種生産物に定着した労働の総和 + 生きた労働 = 生産物に定着した労働……(9)

この(9)式の形の方程式は社会の生産を計量的に調べるための基礎的な方程式であって、生産活動を形づくっている労働過程においての労働の形態転化をその際の労働量の間の量的関係を通じて表現したものであるから、これを労働方程式とよぶのがよいだろう。これは労働量保存則の表現の第一型である。」(田辺振太郎氏著『技術論』、一八九—一九〇ページ、ゴシック体—田辺氏のもの)

「……再生産に関するマルクスの思想によると、労働の生産物に対して周知のように三つの区分がなされる。すなわち、単純再生産を維持するのに必要な労働という意味での必要労働と、拡大再生産の可能性を与える前提となる剰

余労働、との区分に対応して必要生産物と剰余生産物との区分、並びに、全労働のうち、生産財の消費を回収するための労働を差引いた残り分に対応しての純生産物を全生産物から区分することで、結局全生産物、純生産物、剰余生産物、という三種を区分することである。これを労働の区分に対応させて表示すると、



そこで、生産の過程で消費された生産財を再生産するのに必要な労働を L_I 、消費された労働力の再生産に要する消費財を生産するのに必要な労働を L_{II} 、剰余労働を L_{III} 、全労働を L とかくと、労働量の保存法則によって、

$$L = L_I + L_{II} + L_{III} \dots \dots \dots (11)$$

と書ける。このうち、 L は全生産物に定着しているものであり、 $(L_I + L_{II})$ は純生産物に定着しているものであり、 L_{III} は剰余生産物に定着しているものである。すなわち(11)式はすべて生産物に定着した労働についてその種別を生産体系における再生産の構造の中での役割に従って区分したものである。労働量保存則のこの形の表現を(9)式の労働方程式と區別して生産方程式とよぶのがよいであろう。これは労働量保存則の表現の第二型である。」(前出、一九三―五ペ

—ジ、ゴシック体—田辺氏のもの）

右の主張の中には、数多くの錯誤と混乱とがふくまれているようであるが、とりあえず、本論での説明にかんするかぎり、その問題点をつぎに簡単に列挙してみよう。

④ 「生産活動」を「生きた労働が生産諸手段と化合して生産物なる新しい化合物を形成して定着する運動」とするのは、きわめて奇妙な錯誤というのほかない。人間の「生きた労働」によって労働対象が変形されるのが「生産活動」である。右のような主張によつては、人間的労働——つまり「生きた労働」——の主導的役割が無視されるばかりでなく、「生きた労働」と「過去の、死んだ労働」との関係についての正しいとらえ方は不可能となる。生産物の形成にさいしては、「生産財に含まれる定着した労働」などというものは、なんらの役割をも意味をももちうるものではない。生産手段の中にどれだけ「過去の、死んだ労働」がふくまれているかと、またそれがほとんどふくまれているかと、その生産手段が——「生きた労働」のおかげで——生産手段として生産物形成に役立つことには、まったくなんらの変りもない。したがって、生産物形成——すなわち「生産活動」——においては、「生産財という形で定着している労働と生きた労働との化合」などというようなことは、まったく問題にならない。「生産活動」によって生産物がすでに形成されおえたとき、生産物の中にどれだけの労働がふくまれているかということが問題となり、その労働は、生産手段の中にふくまれていた「過去の、死んだ労働」からの移転部分と「生きた労働」による「新たにつくりだされた」部分とから成り立つこと、つまり「死んだ労働」プラス「生きた労働」であることがわかる。生産手段の中にふくまれていた「過去の労働」が生産物の中に移転し保存されるのは、「生きた労働」——それも具体的労働——によって生産手段が移転し保存されるからである。したがって、「労働」という点からみるならば、「生産活

動」は、ひとえに人間の「生きた労働」のみによって成り立っているものといわなければならぬ。「過去の労働」は「生きた労働」のおかげでいわば生産物のうちに附け足されるだけであり、文字どおり「余計なもの」にすぎない。「化合」などしようにもまったくできないのである。

⑨ 「労働の総量が保存されている」——『労働量保存則』——という主張も、きわめて混乱した誤解をあらわしているようである。「保存」という言葉は、すでに存在しているものがその存在を保ちつづけることをいいあらわすものである。したがって、「保存」という言葉があてはまるのは、すでに生産手段の中にふくまれて存在している「過去の労働」だけである。「生きた労働」というのは、生産物形成にさいして、まっ、たく、あら、たに——つまり、いままでまったく無かったところに、は、じ、め、て——つくりだされ、そしてそれによってまったくあらたに生産物に対象化——「結晶」——したものであって、この「生きた労働」部分については、「保存」という言葉はまったくあてはまらない。それは、まさに「創出」なのである。

また、もし、右の『労働量保存則』というような言葉が、「エネルギー保存の法則」という言葉と同じように、「生きた労働」と「過去の労働」とが結びついてその「労働の総量がつねに保存されている」ことをいいあらわすものとするれば、これほど混乱した誤りを示すものはないであろう。なるほど、「生きた労働」、すなわち流動状態にある労働は、必ず生産物に対象化して「過去の労働」とならねばならぬ。一定量の「生きた労働」はつねに同じ一定量の「過去の労働」として生産物のうちに対象化する。これは、当然すぎるくらい、当然のことである。だから、いわば、「生きた労働」は「過去の労働」として「保存」される、ということもできる。だが、「生きた労働」は、いったい、どこから出てくるのか？ それは、どのようにして「保存」されてきたものなのか？ 「生きた労働」は「生きた労働」

働」からは出てこない。では、どこから「保存」されるか？「生きた労働」が「過去の労働」として「保存」されるのと同じように——今度はその逆に——「過去の労働」が「生きた労働」として「保存」される、とでもいうのであろうか？もし、「生きた労働」がどこから、どのようにして「保存」されてくるかが説明できないとすれば、——そして、それは絶対にできない相談である、というのは、もしどこからか「保存」されてくるなどというようなことになれば、「労働」についてのいっさいのおしやべりは全部無意味になってしまうからである——「労働量の保存」などということはまったく言えないことになる。それならば、「生きた労働」がつねにあらたに生産物のうちに対象化する、そして「過去の労働」となる、というだけのことである。

④ 人間的労働は、つねに「必要労働」と「剰余労働」とから成り立っている。「必要労働」というのは、労働力の担い手たる人間自身の維持に必要な生産物部分を生産するに必要な労働部分ということであって、それは、けっして、「単純再生産を維持するのに必要な労働」などという意味ではない。また、「単純再生産」か「拡大再生産」かということとは、人間的労働がつねに「必要労働」と「剰余労働」とをふくむということと直接にはなんらの関係もない。「剰余労働」の生産物部分たる「剰余生産物」を全部個人的に——いわば「不生産的に」——消費してしまう場合には再生産の規模は前回と同じになり、したがって「単純再生産」がおこなわれることになる。「剰余生産物」が全部個人的に消費されないでその一部が生産手段として——そして他の一部が追加的な労働の担い手の維持に必要な生活手段として——生産的に消費されるときには、「拡大再生産」がおこなわれることになる。「剰余労働」および「剰余生産物」はつねにあるが、「拡大再生産」はつねにかならずしもおこなわれるとはかぎらない。「剰余労働」および「剰余生産物」は「拡大再生産」となら直接に必然的な関係はないのである。

③ 右の「表」において、――

「生産のために消費した生産財を再生産するのに要する労働」というものは、いったい、どういうことであろうか？ 生産物の価値の中に移転し保存されるのは、すでに生産手段の中にふくまれている「過去の労働」であって、これからあらたに「消費した生産財を再生産するのに要する労働」ではない。

つぎに、「消費した生産財を再生産するのに要する労働」は、「必要労働」となんの関係もない。いわんや、前者が「必要労働」の一部分を成すなどというようなことは、まったくありえない。

同様に、「消費した生産財の再生産に対応する生産物」を「必要生産物」の中にふくませることも、まったく荒唐無稽の思いつきというべきである。

正しくは、「生きた労働」が「必要労働」と「剰余労働」とに分れるのであり、「生きた労働」の対象化したものが「純生産物」であり、「必要労働」および「剰余労働」の対象化したものが、それぞれ「必要生産物」および「剰余生産物」となるのである。「消費された生産財」の中にふくまれた「過去の労働」は、ただ生産物の中に移転し保存されるだけである。

④ さきには「生産財という形で定着している労働」という言葉が用いられ、あとには「生産のために消費した生産財を再生産するのに要する労働」という言葉がつかわれている。論者は、この二つの「労働」を同じものとしているようであるが、これはけっして同じものということはできない。なぜならば、すでに対象化している「過去の労働」と、これから「再生産に要する労働」とは、必ずしも同じではなく、社会の不斷の発展を前提するかぎり、両者はかならずその量を異にせざるをえないからである。しかも、生産物の中にふくまれる「労働」を形成するのは、

現在すでに生産手段に対象化している「過去の労働」であって、これから同じ種類の生産手段を再生産するばあいには必要とされる将来の「労働」ではけつしてない。論者が「再生産」などという言葉を用いているのは、おそらく、商品生産における「再生産に要する労働時間」なるものを念頭においてのことと推察されるが、しかし、もし生産物の「社会的価値」を問題とするのであるならば、なおのこと、「生産財という形で定着している労働」と「生産のために消費した生産財を再生産するのに要する労働」とは同一でありえなくなるし、それにもまして決定的に大切なことは、「労働量の保存法則」なるものは、もはや妥当しえないものになってしまうのである。商品生産においては、「労働量の保存法則」どころか、これと正反対の「不斷の価値縮少の法則」すなわち、「労働量の非保存法則」がつねに貫徹してやまないのである。

第二。つぎに挙げられるのは、抽象的労働とは「生理的エネルギーの支出」のことである、という議論である。

この「生理的エネルギー支出」という考え方は、おそらく、「人間的労働力の支出」というマルクスの言葉から思いついたものであろうが、「人間的労働力」を「生理的エネルギー」におきかえるという点で、決定的な誤りを犯しているものといわなければならない。「人間的労働力の支出」とは、さきにも説明したように、「人間の脳髓、筋肉、神経、感官、手、足などの生産的支出」ということであって、「生理的エネルギー」とは、直接なんらのかかわりもない。「人間の脳髓」をはたらかせること——「生産的支出」——は、なるほど一種の「生理的エネルギーの支出」であるが、しかし、人間的労働において問題なのは、「生理的エネルギーの支出」そのものではなく、人間の脳髓をはたらかせること、そのことなのである。たとえば、ある簡単な作業をおこなうばあいにも、一定の計画を立て、思考し、目的に向つて身体全体および労働手段のすべてを合目的に動かすようにするためにたえず意志をはたらかし

ていなければならない。これらの判断力、思考力、意志力をはたかせるためには、ある一定量の生理的エネルギーの支出が必要であることはもちろんである。だが、それらを一定量の生理的エネルギーの支出におきかえて、これの量の「生理的エネルギーの支出」というようにいいかえたとすれば、そのときには、それが人間の脳髓の生産的支出であることはまったく消去されてしまう。それらが人間の労働であり、抽象的労働であるのは、「生理的エネルギーの支出」という点にあるのではなくして、たとえば意志力をはたかせること、そのことにあるのである。

人間の脳髓の生産的支出も、人間の手の生産的支出も、ともに「生理的エネルギーの支出」としては、同じ大きさであらわすかもしれない。しかし、両者の生産的支出のあいだには根本的な質的差異がある。人間の脳髓の生産的支出にこそ、人間の労働の本質的差異点があるのであって、これを手の生産的支出などと同じ一箇の「生理的エネルギー支出」に還元することは、人間の労働を動物の労働に引き下げるものでしかない。抽象的労働にかなするつぎのような主張は、きわめて多くの問題をふくんだものである。

「分業による抽象的労働の成立」ということは、分業によって、具体的内容の異なる労働が交換されている、ということであり、それらが自然的な内容が異なるにもかかわらず同じ社会的評価を受けているということにほかならない。そして抽象的労働はこの評価をになう実在性なのである。実在性である以上、それは具体的労働として社会に現存するものもろの労働の中にそれらの間の共通性として実在する何物かである、としなければならない。ところが、具体的労働における多様性は生産の場における人間の活動の多様性によるものであるから、すぐれて社会的なものである。従って一様性をになう共通性は社会的な多様性の基底をなす自然的なもの、の準位まで降ったところに求められなければならないであろう。人間の労働の極めて人間的高級な種類のものと、役畜なみの単純な筋力の使役から成

るもの、との間の共通なものを求めるならば、どうしても自然的な準位まで降ってこなければならなくなる。こうして到達したところは、労働の過程で支出される生理的エネルギー、労働の動力支出、となる。すなわち、抽象的労働の一樣性の基底となっている実在は、労働過程における生理的エネルギー支出である。そして生理的エネルギー支出がここで社会的評価を受けるのは、それが労働過程における支出として労働過程の成立を直接的に条件づけている限りにおいてである。休養のための散歩でも生理的エネルギーは支出されているが、それは労働過程の成立を直接的に条件づけていないから、抽象的労働としての社会的評価の基底とはならない。

抽象的人間労働の自然的な基底としての生理的エネルギー支出は一つの自然量として自己に固有な測度量的構造をもっている。……」（田辺氏著、前出、一七九—一八〇ページ、ゴシック体—田辺氏のもの、傍点—山本）。

抽象的労働についての考え方にかんするかぎりで右の主張の中にふくまれているきわだった錯乱と誤謬とを簡単に指摘すれば、つぎのとおりである。

① 「分業による抽象的労働の成立」という言葉によって、抽象的労働なるものが「分業」の存しないところでは「成立」しないという考え方が示されている。これは、「分業」の有無によって人間的労働そのものの「成立」「不成立」が決定されるのだという、まったく逆立ちした主張を示すものである。

② 「具体的内容の異なる労働」とか「自然的な内容」という言葉によって示されているように、ここでは、具体的労働は「労働の内容」と考えられており、「労働の有用的形態」としては考えられていない。

③ したがって、「労働の内容」に相当する「抽象的労働」は、これとは別に、「社会的評価をになう実在性」などという、まったく見当がいのものとして、あらたにもちこむ必要が生ずるのである。だが、人間的労働、その具体

的労働と抽象的労働という二面性は、「社会的評価」などというものとは、まったく無縁のものである。また、もし、「評価」などではなくて、「計算と配分」が問題であるならば、それは、抽象的労働と具体的労働との二面について、統一のおこなわれねばならぬ。つまり、その場合の「社会的なもの」というのは、人間の労働の二面について——統一的に——いわれなければならない。

⑤ それゆえ、「具体的労働における多様性」が「すぐれて社会的なもの」であるなどという主張は、きわめて一面的であり、論理的にみて混乱したものである。 「具体的労働」が「多様」であるのは当然のことであって、むしろ「多様」であるからこそ「具体的労働」なのである。だが、「具体的労働」が「多様」であるからといって、それがどうして「すぐれて社会的なもの」だなどということがいえようか。「分業」とか「交換」とか「社会的評価」などといった一面的な、皮相な言葉が用いられているところからみると、この論者は、おそらく商品生産社会の労働を念頭においているものと推察されるが、商品生産社会においては、「具体的労働」の「多様性」が「すぐれて社会的なもの」であることは、まったくありえない。「すぐれて」どころではなく、「唯一」の「社会的なもの」は「抽象的労働」の側面についてのみいわれるのである。

⑥ ことに奇怪なことは、「具体的労働における多様性」が「すぐれて社会的なもの」であるならば、「従つて」「具体的労働の間の共通性として実在する何物か」、すなわち「具体的労働の社会的な多様性」の「基底」をなすものは、「自然的なもの」——「自然的な準位」——でなければならない、という主張である。「具体的労働」には「多様性」と「共通性」とがあり、前者は「すぐれて社会的なもの」、後者は「自然的なもの」である、というのである！ その論証として、論者は、「高級な労働」と「単純な筋肉の労働」との二つの異った種類の労働を挙げ、その「間の共通

なものを求めるならば、どうしても自然的な準位まで降つてこなければならぬ」と述べている。どうして「どうしても自然的な準位まで降つてこなければならぬのか？」その理由は、もちろん、あきらかにされてない。それは、あきらかにするところではない、徹頭徹尾まちがったでたための理由づけでしかないのである。

⑤ 「抽象的労働」は「社会的評価をになう實在性」であり、「具体的諸労働の間の共通性として實在する何物か」であり、「一様性をになう」ものである、という。ところが、この「一様性をになう共通性」とは何かといえ、「抽象的労働の一様性の基底となつてゐる實在」であり、「自然的な準位」のものであり、「生理的エネルギー支出」だ、というのである。だから「社会的評価をになう實在性」なるものは、この論者によれば、「一様性をになう共通性」であり、「抽象的労働」でもあれば、また同時に「生理的エネルギーの支出」でもある。ところが、他方では、「生理的エネルギー支出」というのは、「抽象的労働の一様性の基底となつてゐる實在」でもあり、「抽象的労働の自然的な基底」でもなければならぬ。つまり、「具体的諸労働の間の共通性として實在して一様性をになうもの——抽象的労働——のさらに一様性の基底となつてゐる實在」、「一様性をになう實在の一様性をになう實在」、つづめて、「實在の實在」、「一様性の一様性」が「生理的エネルギーの支出」なのである。ただの「實在」、「一様性」つまり一乗の「實在」と「一様性」は「抽象的労働」という「すぐれて、人間的」なもの、社会的なものであるが、自乗の「實在」と「一様性」は、「自然的なもの」となる！

⑥ ところが、このようにして、非論理をあえて犯して折角降つてきた「自然的な準位」でも、事態を救うことはできない。そこで、考え出されたのが、「労働過程の成立を直接的に条件づけている限りにおいて」という、「但し書」である。だが、いったい、「労働過程の成立」とは、どういうことであるか、その「成立」はどうしてきめら

れるか? 「労働過程の成立」ということ、そのこと自体が、人間の労働についての一定の「規定」を、しかも、「すぐれて社会的な」規定を示しているものではないか? 「労働過程の成立」ということそのこと自体がすでに、具体的労働と抽象的労働との二面についての一定の規定をふくんだものであり、またそのかぎりにおいて「労働過程の成立」ということがいえるのである。だから、「労働過程の成立」を条件として「生理的エネルギーの支出が社会的評価を受ける」などという主張は、まことに美事なトウトロギーでしかない。しかも、それがたんなるくりかえしとして片づけられないものであるのは、右のような「条件づけ」によって、いったん「自然的なもの」に還元しおえた「基底」のなかにそれとなく「社会的なもの」をもちこんでしまうという狡智をひそめている点に存するのである。だが、いかに巧妙な論理を弄しても、田辺氏の「自然的なものの準位」という「規定」と、マルクスの「それらに共通なかかる社会的実体、*dieser ihnen gemeinschaftlichen gesellschaftlichen Substanz*」という規定とを「一致」させることは、とうていできない。氏の右のような主張は、むしろ、以下のような似而非マルクス主義的主張に連なるものとみられるのである、——曰く、「マルクスの抽象的労働は、生理的概念であって、これはすくなくとも觀念的には機械的作業に還元しえられるものである」(ストルーヴェ)、「一定の生産物を生産するために社会が必要とする労働エネルギーの量は、この生産的価値またはたんに価値と呼ばれる」(ア・ボグダーノフ)。

第三。第三に挙げられるのは、「抽象的労働」というものは、商品生産社会にのみ特有のものであるという考え方である。(さきの引用でもあきらかなように、「分業」が存在し労働の「社会的評価」が問題となるところだけ「抽象的労働の成立」があるという、田辺氏の主張も、この一種とみなすことができる。)

たとえば、デ・ローゼンベルグはその著『資本論註解』の中で、「抽象的労働」についてつぎのような言葉を並べ

ている。

「商品生産の特殊の範疇としての抽象的労働は、これを、物質的過程から、したがってすべての種類の労働の平等性の物質的基礎から、切り離すことができない」（直井・淡共訳、第一巻、一四八ページ、傍点―山本）。

「それ〔労働力の支出―山本〕は、この過程が商品経済においてとるところの・特殊な・歴史的に制約された社会的形態の結果として、抽象的労働となるのである」（前出、一五一ページ、傍点―山本）。

もし、「抽象的労働」が「商品生産に特殊の範疇」であって、その他の社会に存在しないものとするならば、その他の社会での人間の労働は、具体的労働という一面をもつだけで、人間の脳髓、筋肉、神経、感官、手、足等々の生産的支出はおこなわれないことになる。人間の労働力一般の支出のない人間の労働があるということになる。このような考え方が、人間の労働についての粗雑な理解をあらわすだけのものであることは、いうまでもない。

マルクスは、『資本論』第一巻第一章第四節「商品の物神的性格とその秘密」の中で、抽象的労働について「有用的諸労働または生産的諸労働がいかに相異なっていようと、それらは人間的有機体の諸機能であるということ、および、かかる機能はいづれも、その内容や形式がどうあるとも、本質的には人間の脳髓、神経、筋肉、感官などの支出であるということは、ひとつの生理学的真理である」（前出、七七ページ、訳①―一七一ページ、傍点―マルクス）と述べ、この「人間の労働力一般の支出」としての「抽象的労働」がいかにすべての社会において規定的な意義をもっているかということを、右につづいてつぎのように説明している、――「……右の支出の時間的継続、または労働の量についていえば、この量は感覚的にも労働の質から区別されうるものである。どんな状態のもとも、人間は、――発展諸段階の相違するにつれて同じ度合にはなかったが、――生活手段の生産に要費する労働時間に関心をもちねば

ならなかった」(前出、同ページ、傍点―マルクス)。

また、同じ節の中の周知の「ロビンソン物語」についての敘述も、右のような「抽象的労働」についての説明をより明確にするためにこそ、かかげられたものといえることができる。

「……ロビンソンは相異なる種類の慾望をみたさねばならぬのであり、したがって……相異なる種類の、有^レ用的労働をなさねばならぬ。……彼の生産的諸機能は相異なっているが、彼は、これらの機能が同じロビンソンの相異なる活動諸形態にほかならず、かくして人間的労働の相異なる諸様式にほかならぬことを知っている。彼は必要そのものに迫られて、自分の時間、を自分の相異なる諸機能のあいだに正確に配分する」(前出、八二ページ、訳(1)―一七八ページ、傍点―マルクス)。

右のようなマルクスの敘述をふくむ第一章第四節の中から多くの引用をしながら、なおかつ「抽象的労働」の「歴史的社会的性格」を強調してやまない主張もつくりあげることには——『論理的』には——可能なのであって、つぎに挙げるのは、その顕著な一例である。

「ひとは屢々価値という範疇の歴史的社会的性格について説く。これは比較的見易い道理である。(価値は直接に交換価値乃至価格に結びついているから。(1))けれどもその形式として価値をおびる内容としての抽象的労働(そのものの)については、かかる歴史的社会的性格を忘却するか、いなむしろこれを抹殺する。蓋し抽象的労働に関する範疇規定(乃至多かれ少かれ及び實在規定)を固執するかぎりかかる思想に陥るのは必至である。しかしもしそうであるならば形式と内容、外的なものとの内的なもの、すすんでは現象と本質との不可離の統一関係は無視されてしまう。何者、形式のみは歴史的社会的性質であって、内容はこれに反して超歴史的自然的性質であるということにな

る。かくの如き見解は、抽象的労働に関する全くの機械論的解釈である。……

抽象的労働がいかに商品経済に特有の規定であるかについては、左のマルクスの文章のうちに明瞭に看取しうるであらう。

曰く「……ここでは、**労働が社会的性格を受けるその特殊な形態**のみが、問題となる。……（中略—山本）……あるいは最後に、すべての文化民族の歴史の入口において見られるような、自然発生の形態における共同労働をとってみよう。ここでは、労働の社会的性格は、あきらかに、個々人の労働が一般性という抽象的形態をとることによって、すなわち彼の生産物が一つの一般的等価物の形態をとることによって媒介されているのではない。生産の前提となっている共同体こそは、個々人の労働を私的労働にすることなく、彼の生産物を私的生産物にすることもなくて、むしろ個々の労働を直接に社会有機体の一肢節の機能としてあらわれるようにさせているのである。交換価値であらわされる労働は、個別化された個々人の労働として前提されている。それが社会的なものとなるのは、それが、その正反対の形態を、抽象的一般性という形態をとることによるのである。」（『経済学批判』、ディーツ版、二六—七ページ、訳文は国民文庫版による—山本）

かくして我々は前節の末尾に提起した問題に答えうる。即ち、社会主義社会においては抽象的労働の範疇規定も実存規定も存するが、その実現規定が存しない。蓋し社会主義社会における生産は、「自然発生の形態における共同労働」の場合と同じくその前提として「**共同社会**」を有するからである。かかる社会においては個々人の労働は生産過程で直接的に社会的性格を帯びており、決してその抽象的労働なる形態を基礎にして——交換が行われることによつて——はじめて社会的性格を顕然化するなどということはない。かかる社会においては、個人的労働は「外化せる

個人的労働」としてその性格を表わすことはない。これが社会主義社会においては抽象的労働の価値化しない所以である。それはいわば社会的に要求されないのである」(遊部久蔵氏著『価値論争史』、一四七—一五〇ページ、傍点、遊部氏のもの、ゴシック体および(?)——山本)。

みられるように、ここにあるのは、マルクス価値論についてのこの上もない誤解とヘーゲル弁証法についての同じくこの上もない錯乱と迷論理との累積である。そのうち、当面の問題にかんするかぎり、二、三のものを摘記しておこう。

④ 「形式としての価値」と「内容としての抽象的労働」という氏の言葉があきらかに示しているように、氏によれば、「抽象的労働」と「価値」とは「内容」と「形式」との関係にある。このような「内容」と「形式」とのとりえ方は、まったく超弁証法的な、氏独特のものである。マルクスにあっては、「抽象的労働」は——商品生産社会では——「価値の実体 Substanz」であって、それ以外の何物でもない。だが、「実体」は、「形式」にたいする「内容」とは、まったく違ったものである。

もし、「抽象的労働」が「内容」であって「価値」がその「形式」であるというのであるならば、同様にしてたとえば、「労働生産物」が「内容」であって「商品」がその「形式」である、「労働者」が「内容」であって「奴隷」がその「形式」である、ということができよう。

⑤ 「形式と内容」との「不可離の統一関係」が強調されているが、いったい、右のような「価値と抽象的労働」との「統一関係」とは、どういうことであろうか?

たとえば、「価値」と「交換価値」とについては、前者が「本質」であり後者がその必然的な「現象形態」である

といわれる。価値は必ず交換価値として現象しなければならないし、交換価値として現象するものは価値にほかならない。交換価値を離れては価値は存在しえないし、価値をはなれては交換価値はありえない。両者はまったく不可分離であり、完全に「統一関係」にある。だが、抽象的労働は、価値とはなれて、価値として結晶することなく、およそ人間の労働の存するかぎり、つねに行われる。価値も交換価値も共に私的所有という同一の生産関係を前提し、これと固く結びつき、これによって必然的に制約されるが、抽象的労働は、なにも私的所有と密接不可分離のものではない。

① ところが、「形式と内容」との「不可離の統一関係」を強調して「形式」が「歴史的社会的性質」のものならば、「内容」も当然に「歴史的社会的性質」のものでなければならぬ、という「論法」を、類似の「形式と内容」に適用してみよう。たとえば、「商品」が「形式」であって「労働生産物」がその「内容」である。「商品」は、もちろん「歴史的社会的性質」のものであるから「労働生産物」も当然に「歴史的社会的性質」のものでなければならぬ。つまり、「労働生産物」は商品生産社会にだけ存在して、他の社会には存在しない、それは、「商品経済に特有の規定」なのである！ また、「奴隷」は「形式」であって「労働者」はその「内容」である。「奴隷」が「歴史的社会的」なものであるから「労働者」も「歴史的社会的」なものでなければならぬ、つまり、「労働者」が存在するのは『奴隷社会』だけであって、そのほかの社会には、いてはならないのである！

② 「抽象的労働の範疇規定」というのは、遊部氏によれば、「抽象的労働」の「最も原始的な観念」であって、「商品体から使用価値＝具体的・有用的労働を捨象してあとに残るものとしての抽象的労働という理解にとどまる」ものであり、「人間の頭の中で抽象化された観念」「自然的観念」にすぎないのであって、「抽象的労働」をこのよう

な「生理学的等質労働」と解するかぎり、「原始共産体内部においても将来の社会主義社会においても価値という範疇が考えられることになる」と、主張されている（前出、一三〇—一二ページ）。もちろん、理由は示されていないが、おそらく、「範疇規定」という一語で、すべての社会に「価値」が存在することになるのである。

⑤ 「抽象的労働の実存規定」とは、氏によれば、「簡単・平均労働」が資本主義社会で「実存」しているということである。「一定の労働に対する無関心」というものが実際に在るかないかの問題である。遊部氏は、この「労働の一定種類に対する無関心」、「労働の自由な転換」は、社会主義社会では、資本主義社会におけるよりもはるかにすすむから、「労働の抽象化、抽象的労働の对象的、感性的実存規定はより完成したかたちで確立する」と主張する（前出、一三三—九ページ）。

⑥ しかし、「抽象的労働の範疇規定」もその「実存規定」も「抽象的労働の価値化」を説明することはできない、と氏は主張する。「抽象的労働の価値化の契機を抽象的労働自身の固有の、内在的性質のうちに見出す」こと、「商品Ⅱ資本制経済という社会的Ⅱ歴史的条件が抽象的労働そのもののうちに構成的に入ってきている」こと、によって、「なぜ、抽象的労働が価値となるか」という我々の最初の設問に答え」ねばならないが、それに答えるものが、右の引用文の最後に述べられている「抽象的労働の実現規定」というものである。

ところで、氏が引用しているマルクスの文章をよく読んでみるがよい。いったい、どこに、「抽象的労働の価値化の契機を抽象的労働自身の固有の内在的性質の中に見出す」ことの説明があるのか!? いったい、「抽象的労働自身の固有の、内在的性質」というのはなににか？

マルクスが説明しているのは、読んで字のごとく、「労働が社会的性格を受けとるその特殊な形態のみ」である。

「抽象的労働そのもの」が問題なのではない、いわんや、「抽象的労働自身の固有の、内在的性格」など、全然お話の外である。マルクスがとり上げているのは、商品生産社会の「労働」とその他の「家父長制経済」、「中世社会」および「原始共同社会」の「労働」である。これらの相異なった社会において、その社会を支えている「労働」がどういう形態をとることによって「社会的なもの」となるかということが問題なのである。その場合の「労働」は、いうまでもなく、「抽象的労働そのもの」ではなく、具体的労働と抽象的労働との二面をもつところの、両者の統一としての、人間の労働にほかならない。

「労働の社会的性格」についての明瞭な説明を「抽象的労働そのものの固有の、内在的性格」の説明だとして「利用」することは、なんとあきれてた『弁証法的』論法であらうか!?

以上によってみれば、「範疇規定」とか「実存規定」とか「実現規定」などというもったいぶった『ヘーゲルの用語が、かえって遊部氏自身のヘーゲル論理学についてのお話にならない一知半解ぶりを示しているだけだ、ということはありません明白である。このような辞句のひねくり廻し——「乾葡萄の糞ひり」（エンゲルス）——は、まことに、「言葉が先きに来る」ということの適例である。（なお、右のような「抽象的労働は商品生産社会にだけ特有の歴史的範疇である」という逆立ちした議論は、ことにわが国の多くの理論家によってわけわからずに主張されているのであって、これについては、拙稿「市場価格と市場価値（完）」——本誌第十一巻第一号（七—九ページ）——を参照されたい。）

具体的労働と抽象的労働という、労働の二面性を正しくとらえることのむづかしさは、——右によって知られるように、——抽象的労働そのものを労働の社会的性格そのものにとりちがえやすいという事情によるものがすくなくない。だが、労働の二面性の問題と労働の社会的性格の問題とは、まったくその性質を異にしているのであって、これ

ら両者についてそれぞれの内容を正しくとらえた上で、両者を正しく関係づけ結びつけることが大切なのである。そこで、とりあえずつぎの節で、この労働の社会的性格の問題について簡単にふれておこう。

(6) 労働の社会的性格

人間の労働力の担い手は人間個人であって、労働をおこなうのは社会を構成しているひとりひとりの人間である。だが、もし、ひとりひとりの人間がかれ自身の労働生産物をかれ自身で消費し独力でかれ自身の維持Ⅱ再生産をおこなっているならば、いいかえれば、必要生産物の生産および分配、消費において相互になんらの関係もとらずばないならば、かれらは経済的な意味ではなら社会を構成するものではなく、むしろ、各個人が個々別々に『社会』をつくりあげていることになる。この場合には、その言葉の本来の意味における社会は存在しないし、したがって労働の社会的性格を論ずることはできないが、しかし、そのかれら個々別々のいわば『社会』的生産においてさえ、なおかつ抽象的労働と具体的労働の二面を当然に考慮に入れなければならないということは、さきに引用した「ロビンソン物語」の敘述に照らしても明白である。

労働の社会的性格が問題とされるのは、多数の人間が生産および分配、消費において相互にかたく結ばれ、依存しあっている社会についてである。ここでは、各個々人の労働全体が社会の存続を支えるものとならなければならないし、そのような意味で個々の成員の個人的労働は社会的労働とならなければならない。では、各個人の個別的労働はどのような形態をとることによって社会的労働となるか？

一例として、原始共同社会あるいは家父長制的社会をとってみよう。ここでは、各個人は、自然生的な紐帯によっ

てかたく結びつけられていて、各個々人がすでに一個の結合した共同的労働力の一部分を構成するものとなっている。そこでは各個別的労働力の担い手たる個人は、この共同的労働力の諸器官としてのみ作用することをゆるされる。したがって、人間的労働力そのものがすでに結合した社会的なものであって、その流動としての労働ははじめから社会的なものであり、またそのかぎりでのみ存在することができる。その流動としての労働は、たんに人間的労働力一般の支出という意味での抽象的労働の面においては、共同的労働力の諸器官として作用することにならない。この共同社会にとって必要な諸生産物を生みだす特定の各種の労働、すなわち具体的諸労働の面において、いいかえれば、その自然的形態における労働の面において、はじめて社会的な労働としての形態を得るのである。

労働の自然的形態、いいかえれば具体的諸労働という面が労働の直接に社会的な形態であるということは、社会の成員が人格的な依存関係によってかたく結びつけられた封建制社会においても、また、社会的所有のもとに意識的に結合した成員から成る社会主義社会においても、同様である。そこでは、すでに人間的労働力の支出がおこなわれる以前に、人間的労働力の担い手のあいだに、——あるいは、その担い手と他の成員との間に——一定の社会的な結びつきがあり、いわばこの社会的紐帯を維持し再生産するためにのみ、人間的労働力の支出たる労働があるということになっているのである。したがって、そこでは、人間的労働力の支出一般ではなくして、特定の形態における支出が、いいかえれば、労働の自然的形態が、労働の直接に社会的な形態となっているのである。

右に挙げたいづれの社会においても、労働の社会的性格は、労働の自然的形態に、いいかえれば具体的労働という面において、直接にあらわれるものである。では、抽象的労働という面は、これらの社会においてどのような意味をもちうるであろうか？

労働の自然的形態が直接に社会的な形態となっていることは、人間の労働力そのものがそもそもから社会的なものとなっているということをあらわすものである。したがって、当然に、各個人の労働力は、社会的な総労働力の一構成分子として、いいかえれば、同じ人間の労働力として、社会の存続にとって必要な諸生産物を生産するために必要な、各具体的諸労働面に配分されなければならない。この総労働力の配分においては、労働の自然的・具体的形態との対比において、当然にその抽象的形態が、いいかえれば、同じ抽象的労働の量——労働時間——が、決定的な意義をもたなければならない。その社会の自由にしうる総労働力の流動一般としてその総労働時間を把握し、これをそれぞれの必要生産物の一定量の生産のための具体的労働として配分することをしないでは、社会的生産はその実を挙げるができない。このように、各個人の所有する人間の労働力の支出が現実におこなわれる以前に、すでに、その人間の労働力の支出一般としての抽象的労働が労働時間という形で問題にされ、計算されうるのは、そもそものはじめから、各個人の労働力は、結合した共同的労働力の一分子としてのみ存在することを定められているからである。

それゆえ、これらの社会においては、事態はつぎのようになっていえる。すなわち、各個人の人間の労働力ははじめから社会的総労働力の一分子として存在しているがゆえに、その人間の労働力の支出すなわち労働は社会的に規制され、そもそものはじめから社会的なものとならなければならないものである。そして、その人間の労働力の支出は、抽象的労働という面において配分がおこなわれ、このようにして配分された人間労働力の支出はその具体的形態において必要生産物の必要量をつくりだし、かくして、現実には社会的労働であること——もしくは社会的労働となること——を実証しなければならない、と。要するに、ここでは、労働力の支出における具体的形態が

そのまま労働の社会的性格を示すものとなっているのである。⁽⁶⁾

(6) ところが、私的所有にもとづく商品生産社会では、労働の社会的性格は右とまったく違った形を、むしろ、正反対の形をとってあらわれる。そこでは、のちにみられるように、労働力の支出における一般的形態が、つまり、抽象的労働そのものが、労働の社会的な形態となるのである。

⑦ 人間的労働の質的規定

労働の二面性のうち、具体的労働は人間的労働力の支出の有用的・具体的形態についてみたものであって、ここでは、いわば労働の質的差異が問題となっている。これにたいして、抽象的労働は、右の具体的形態の質的差異を捨象したものの、いわば等質の人間的労働力一般の支出にすぎないのであって、この場合には、人間的労働力の支出の大きさが、いいかえれば、一般的支出の量的差異が問題となる。人間的労働力の支出とは、さきにも見たように同じ人間の脳髓、筋肉、神経、感官、手、足などの生産的支出であり、同じ人間的労働であって、すべての人間について同じ質のものであって、その量的差異は、もっぱら、その支出の時間的差異によって制約されるもののように考えられる。だが、この人間的労働力一般の支出ということも、実は、すべての人間について、同じ質のものであるということとはできない。したがって、簡単に、すべての人間的労働を等質のものとして、ただその支出の時間的継続によってその量的差異が生ずるというようにはならないのである。人間的労働の量的差異を問題とするには、それにさきだって、それらを同じ質のものに還元しなければならない。そこで、つぎに、人間的労働——抽象的・人間的労働——の質的規定の問題を簡単にみておくことが必要となる。

まず、同じ人間の脳髓、筋肉、神経、感官、手、足等々の生産的支出がおこなわれるばあい、単位時間内にどれだ

け、支出されるか？ ということが問題である。同じ単位時間内に、一方は二〇の生産的支出があり、他方は四〇の生産的支出があれば、一方は他方にたいして、二倍の強められた質をもっていることになる。これは単位時間内における支出の流動のいわば「密度」を示すものであって、ふつうに「労働の強度 *Intensität der Arbeit*」と呼ばれるものである。人間的労働は、つねに人間的労働の生産的支出であって、ある一定量の生産物を生み出すものでなければならぬことはいうまでもないが、「労働の強度」はその生産的支出について支出の「密度」を示したものであることができる。それがどれだけの量の生産物に対象化するにはかわりなく、その対象化すべきものが単位時間内にどれだけの「濃度」をもって支出されたか、ということを示すものである。それゆえ、「労働の強度」は、人間的労働のひとつの重要な質的規定をなすものといわなければならない。

ところが、人間的労働力の生産的支出については、なお他の一側面が考慮されなければならない。それは生産的支出の「生産的」という点である。人間的労働力一般の支出は、たんなる支出ではなくして、必らず、ある特定の生産物をつくりだすための支出でなければならない。つまり、できるだけ多くの生産物に対象化するものとして支出されるのでなければならない。たとえ、いかに強められた強度をもって支出されたとしても、それがなんらの生産物をも生み出さず、したがってなんらの生産物にも対象化しえないで終わったならば、それは、人間的労働たる資格をもちえない。同じ強度の人間的労働力の支出がおこなわれて、一方は他方の二倍の同じ生産物に対象化したとすれば、その一方の人間的労働は、他方にたいしてやはり二倍の生産的支出をおこなったことになる。このように、同じ強度をもって支出されながら、それが対象化する生産物量がちがうのは、人間の脳髓、筋肉、神経、感官、手、足等々の支出の流動において一方が他方に比べてより生産的であり、より効果的であるからである。いいかえれば、同じ強度の労働

働力支出であつても、その「作用度」がちがうからである。同じ密度の労働力支出であつて、その生産物量がちがうのは、要するに、その労働における「熟練」(Geschick)がちがうことである。それゆゑ、人間の労働の質的規定をなすものとし、ここに「労働の熟練」が挙げられなければならない。

以上によつて、人間の労働の質的規定としては、「労働の強度と熟練」との二つがなければならないことがわかる。われわれは、人間の労働を問題とするかぎり、必ず、この両者の質的規定を考えなければならない。これら二つの質的側面を、しかも、一定の「強度と熟練」をもつ人間の労働のみが問題となりうる。また、人間の労働の質については、ただ「労働の強度」だけをとりあげるといふようなことがあつてはならない。「労働の強度」と「労働の熟練」とは人間の労働の質を規定する二つの契機であつて、この二つを切り離して理解してはならない。両者は、かならず緊密な連関のもとで、むしろ、つねに統一的に、把握されることが重要である。このことは、たとえば、そのどちらか一方を問題とするときに必らず他方のものを前提することが必要となるということ、その一方は必らず他方との結びつきにおいてとらえなければならぬの意味をももたない、という一事を見ただけでもあきらかである。

人間の労働の質的規定としての「労働の強度と熟練」について、なお注意すべきことは、人間社会の発展につれてその社会の平均的な「労働の強度と熟練」もかならず発展するということ、「労働の強度」も「労働の熟練」も、その社会的平均度は、より低いものからより高いものに向上しないではないということである。

社会が発展するにつれてその社会的平均的な「労働の熟練度」が向上し発展するということは、つぎにのべる「労働の生産力」の発展という側面からみても、比較的容易に理解しえられるが、「労働の強度」の社会的平均度の向上ということとは、それほど簡単にはとらえられない。だが、人間社会の発展するにつれて、人間は、同じ密度の、つま

り同じ強度の労働で同じ時間だけならいてより多くの生産物をつくりだすことができるようになるばかりでなく、同じ単位時間内に流動させる労働の密度——「労働の強度」——をより大にし、したがって同じ時間内に人間的労働力のより多くの流動をなしうるのであって、むしろこの後者の点にこそ、人間社会の発展にともなうての人間自身の発展、という事実がより鮮明にあらわされているのである。たとえば、手ひとつの動き方にしても、未開人のそれと文明社会の人間のそれとは、いちじるしいちがいがあ（いうまでもなく、ここで問題なのは、その社会の平均的個人のそれであって、ある特殊な、例外的な個人のそれではない）。そのちがいは、「熟練度」にあるばかりでなく、また「強度」についてもみられる。同じ強度で労働したとしても、後者は前者の数十倍乃至数百倍の生産物をつくりだす。これは、「労働の熟練」のひらきをあらわす。また、同じ一時間に支出する労働量は、後者においては前者のやはり数十倍乃至数百倍に達する。とりわけ、そのちがいの甚しいのは、人間の脳髓の生産的支出についてみられる。後者における脳髓の生産的支出、その流動は、その生産的效果からいっても、その密度からいっても、前者のそれとは比較を絶するほどのものである。そして、このことはまた、当然のことでもある。人間的労働力の生産的支出、人間的労働によって社会の存続の発展が保証されるが、このことはまた同時に、人間的労働力そのものの変化の発展をもたらすものとなるからである。（この点については、本稿第十節「人間の存在様式」でふれる）。

(8) 労働の生産力

「労働の生産力」という言葉は、人間的労働力の生産的支出である人間的労働によって、どれだけ量の生産物がつくりだされるかということであらわすものである。「富の源泉としての人間的労働」、「社会存続の条件としての労働

働」ということを考えれば、人間の労働について、まず「労働の生産力」が問題とならざるをえないということはあきらかである。いうまでもなく、人間の労働力の二倍の量の支出があれば、その結果として二倍の量の生産物がつくりだされるが、このばあいには、「労働の生産力」が増大したことはない。したがって、労働の生産力を問題とするばあいには、かならず、人間の労働力の支出する量を一定不変のものと前提して考えなければならない。一定量の労働力支出についてその効果としての生産物量の変化に増減をみるのであるから、さきにのべた人間の労働の質的規定として挙げた「労働の強度および熟練」の二つのうちで、ここに当然問題となるのは、「労働の熟練」でなければならない。

そこで、労働の生産力という言葉の意味するところを、いいかえて、つぎのようにいいあらわすことができるであろう。それは、すなわち、人間の労働力を一定の強度をもって一定時間支出することによって、どれだけの量の生産物をつくりだすことができるかということ、または、一定密度の一定量の人間の労働がどれだけの生産物量に対象化するかということを示すものである、と。

労働の生産力を決定するものとして第一に「労働の熟練」が挙げられるのはいうまでもないが、しかし、これはたんに生産における主導的要因としての労働力の支出の面についてだけいわれたものである。ところが、人間の労働力の一定量の支出、しかも一定の熟練度における支出を前提として、なおかつ、その支出の結果として生産される生産物量の変化——とりわけ、その増大——をもちきたす要因が人間の労働力そのものの以外に存在する。それは、「自然諸関係」をのぞけば、「科学およびその技術学的な応用可能性の発展段階・生産過程の社会的結合・諸生産手段の範囲および作用能力」（インスティテュート版『資本論』第一巻、四四ページ、訳(1)——二二ページ)である。これらの内容についてはす

でに前稿⁽⁷⁾において説明したので、ここでは、そのうちの「生産過程の社会的結合」について若干の補足をしておくことにしよう。

(7) 拙稿「科学的經濟理論の創造的發展について」(二)(本誌、第十三卷第二号、八六—九一ページ参照)。

さきに「労働の社会的性格」の中でのべたように、人間的労働は社会の存続を支えるものとして、なんらかの形で必らず社会的総労働の一分子とならなければならない。人間的労働力の担い手である各個人がはじめから社会的総労働力の一分子としてのみ存在し、共同的労働力の諸器官としてのみ作用すべきところにおいては、多かれ少なかれ、多数労働力の共同的作業がおこなわれるのであって、このようないわば原始的協業は、社会を支える人間的労働の本質的な一側面を成しているものといえることができる。すでに端初的な分業——男女別、家族成員別の——は、人間的労働を動物の労働から区別する出发点として認められているが、この分業と並んで、——もしくはその端初的な分業の上に——原始的協業は、人間的労働を真に人間的労働として特徴づけるものとなっているのである。本稿の第十節「人間の存在様式としての労働」の中でも述べられているように、人間的労働力の流動としての労働そのものによってのみ、人間的労働力自身の維持・発展がおこなわれたとすれば、共同的結合労働——協業——は、それによって労働の生産力をいじりしく増大させることによって社会発展の物質的基礎を拡大すると同時に、人間的労働力そのものの成長・発展を生み出さずにはおかまいということもまたあきらかである。

いづれにせよ、労働の生産力の増大は、社会発展の主導的要因を意味するものであると同時に、人間的労働力そのものの、人間そのものの成長・発展を意味するものとして、決定的に重要な意義をもっている、したがって労働の生産力増大の各要因についても、そのそれぞれの意味、内容、それらの相互の関連についてできるだけ全体的な理解が

要請されるのである。これらの各要因が、どのような意義をもってくるかということは、行論のうちにおいて示されるところである。⁽⁸⁾

(8) なお、「労働の生産力」に関連して、人間的労働を特徴づけるものとして、それが労働力の担い手自身の維持再生産に必要な生産物より多くの生産物をつくりだす力をもっていること、人間的労働力はそれ自身の必要より多くのものをつくりだす天賦の歴史的才能にめぐまれていることが指摘されねばならぬ（このことは、すでに本稿二四ページ十一行目にも示されている）が、しかし、この才能の歴史的社会的性格を強調する必要があるので、いまここでとりあげておくことをさげ、行論において右の性格を述べるさいにとりあげることとした。

(9) 生産物の取得

さきにみたように、社会的富をつくりだすもの、社会の存続を支えるものは、人間的労働である。労働するために必要な生産手段、とりわけ労働手段は、いうまでもなく、人間的労働力の担い手たる人間自身がこれをつくりださねばならない。人間が人間的労働力の支出によってつくりだすものは、一方において生産手段であり、また、他方において労働力の担い手自身の生存に必要な生活手段である。結局、生産そのものは——さきにのべたように——人間および人間社会そのものの存続のためのものであり、労働は労働力の担い手たる人間自身の維持再生産のための労働であり、生産手段および生産物は、同じくその人間自身の維持再生産のためのものである。必要生産物である生産手段および生活手段を自然から「とりだし」「自分のものにする」には、人間は自分自身の労働力をはたらかさねばならない。だから、つづめていえば、人間は労働力の維持のために労働力を支出するということになっている、ともいえるのである。

それゆえ、生産物の取得が自己労働によって決定される⁽⁹⁾ということは、議論の余地なく、自明のことであって、このことは、要するに、「人間および社会の存続の条件としての人間的労働」ということの別箇の表現にすぎないのである。

(9) 生産物の取得が自己労働によって決定されるということは、人間は生存するためには生産的労働をしなければならないし、自分に必要な物を自分でつくりださなければならないということを云いかえただけのものであって、このように事改まって「生産物が誰のものか、をきめるのは、自己労働である」などと定式化するのは、仰々しくもあり、奇妙にも思われるかもしれない。だが、人間的労働についてその基本的一般の意味を究明しておくさいに、このように「取得」について明確な定式化を与えておくことは、きわめて重要な意義をもっているのであって、このことは、つぎの二点に照らしてみてもあきらかである。

その第一は、社会的な生産関係のいかんによっては、右のような一見自明と思われる「自己労働による取得の決定」がおこなわれないということ、場合によっては、これと正反対の取得決定がおこなわれるということである。たとえば、資本制の生産関係のもとでは、「所有」と「労働」とが対立し、「自己労働」は「取得」から排除され、「非労働」たる「所有」が「取得」を決定するものとなっているのである。

その第二として挙げられるのは、商品生産社会における価値法則との関連である。いうまでもなく、価値法則とは、これを簡単に定式化すれば、「ある使用価値の価値の大きさを規定するものは、社会的に必要な労働の分量、または、その使用価値の生産のために社会的に必要な労働時間に他ならない」(マルクス)ということである。これをつづめていえば、「投下労働量による価値決定」ということができるであらう。ところで、「自己労働による取得決定」とは、いかえれば、「ある生産物を自分のものにすることは、それだけ労働を投下しなければならぬ」、「ある生産物はその生産者にとってどれだけかの労働に値する」ということである。いうまでもなく、商品の「価値」は、社会的価値であって、生産者個人にとって値したという意味での個人的「価値」とは、その性質をまったく異にする。だが、「ある生産物を自分のものにするためには、これこれの自己労働をかけなければならぬ」ということは、右の価値法則にとって、いわば、一箇の自然的基礎を成しているもの、その社会的・一般的基柢をなすものとみることができるし、またそのようなものとして試みることが必要である。このように両者の間の関連を正しくとらえることによって、価値法則がいかにして、どのようなものとして生れたかということも正しく理解されるし、また、価値法則の発

展——その展開と消滅——の法則も論理一貫的にとらえることができるのである。

(10) 人間の存在様式としての労働

最後に指摘されねばならないのは、労働こそまさしく人間の本来の正常な生命活動であるということである。

人間は、その人間的労働力を機能させ、活動させることによって、はじめてその人間的労働力—精神的諸能力と肉体的諸能力—を維持し、再生産することができる。人間が他の動物と異なるところは、労働力をもち、これをはたらかすことによって、自分自身を労働力の担い手として維持し、発達させるところにある。もし、人間的労働力を機能させないで休止させておこならば、人間的労働力は維持されないばかりか、たえず退化して、動物以下的存在に落ちこんでしまう。たとえば、筋肉をはたらかすことなく休止の状態にとめておこならば、ついにはこの筋肉—肉体的能力—は退化して、もはや運動に堪えることができなくなってしまう。とりわけ、人間の脳髓—精神的能力—は、これをたえずはたらかすことなく、安易な使い方ばかりしているときは、それ以外の使い方はできなくなってしまう。たえず駄本ばかり読んでいれば、その人間の脳髓は、駄本しか読めないものとなりさがる。寝ても覚めても金儲けのこ とばかりしか考えられない脳髓は、人間の本当の在り方について何ひとつ知ることのない片輪の脳髓となってしまう。

人間の労働力は、したがってまた労働力の構成要素たる人間の脳髓、筋肉、神経、感官、手、足等々は、これをたえず適当に機能させ、活動させることによって、はじめて健全な状態において維持されるばかりでなく、また、それによってふだんに発達をとげることができる。その反対に、たといかにすぐれた身体をもつていようと、その人間的労働力をたえず適当に機能させ訓練させることがなければ、したがって労働することなく安易な生活を送ってい

るならば、その人間的労働力——とくに精神的諸能力——はしだいに退化し、人間としての資質をうしない、ただの動物的存在になり下ることは必然である。

それゆえ、人間的労働力の流動たる労働によってのみ、人間は人間として実存することができる。労働を通じてのみ、人間は人間となることができる。人間の名に値するものは、だから、ひとり労働する人間だけである。労働は、人間を人間として維持し、発展させるためのものであって、人間自身にとって、正常な生命活動のひとつ——しかも基本的なひとつ——であって、人間にとってのよ、こ、び、でなければならぬ。労働することこそが正常な「生命の悦び」であって、労働しないことは苦痛であり、損耗なのである。⁽¹⁰⁾

(10) それゆえ、労働そのものが労働する人間自身にとって「彼の安樂、彼の自由および彼の幸福の同一部分を犠牲に供する」(A・スミス)こととなっているというのは、すでに労働が正常な生命活動としておこなわれることを阻害されるような特別の社会的生産関係による制約があるということを物語っているものである。